

令和5年度 奈良市立左京こども園 研究実践概要

園長名 阿部 靖子
全園児数 106名

1. 研究主題 しなやかな心と体を育む保育を目指して
—子どものもつ力を引き出す保育者の関わり—

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

予測困難な未来を生きる子どもたちが、たくましさやあきらめない気持ちをもち立ち向かっていく力や、しなやかに状況の変化に対応していく力を身につけ、幸せに生きていってほしいと願い、この主題を設定した。今年度は、保育者の在り方に焦点を当て、本来子どもがもっている力を引き出す援助について探っていきたい。

4. 具体的な研究内容

① 研究のねらい

子どもたちが様々なことに興味をもち肯定的に取り組んだり、あきらめずに挑戦したりし、自信をもって自分らしく生きる力をもった子どもを育む。

② 研究の重点

子どもの発達、成長に応じた取り組みを行い、子どもの心の動きに着目し、保育者の子どもの力を引き出す援助や関わりを探る。

③活動の方法

- ・園内研究会を実施し、多面的に振り返る場をもつ。
- ・日々の保育の振り返りを行い、子ども理解と職員間の共通理解のための機会をもつ。
- ・事例を作成し、職員間で読み解き、学び合う機会をもつ。

[3歳児] 「いっしょにつくろう」 [10月] 保育者の援助 子どもの心の動き



A児は毎日、好きな遊びの時間になると「先生、一緒におやまつくろう」と保育者を誘い、おやまをつくることを楽しんでいました。しかし、保育者が他の子どもに誘われ、違う遊びに行くと、しばらくしておやまづくりをやめてしまう。

ある日、保育者がA児に『どれくらい大きなおやまにするの?』と尋ねると、「こんくらい!

(自分の背と同じくらい)」と答えた。部屋に戻り、保育者がクラス全体におやまづくりについて紹介すると、次の日には、「なにしてるの?」「一緒にしよう」とB・C児が遊びに加わった。A児は、嬉しそうにB・C児と一緒ににおやまづくりを始めた。保育者は『大きくなってきたね』等、言葉を掛けながらしばらくその様子を側で見守ったり、一緒に砂をかけたりしていたが他児に呼ばれ、その場を離れた。しばらく違う遊び場で過ごしていると、A児が保育者の所まで駆け寄り、「先生、来て!おやまな、めっちゃ大きくなったで!」と嬉しそうに伝えに来た。また、片付けの時間になると「明日はもっと大きくするねん」と3人で話していた。

(反省・評価)

それぞれが自分の好きな遊びを楽しんでいたが、おやまづくりをクラス全体に共有したことをきっかけに、おやまづくりに興味をもって遊ぶ子が増えた。保育者や友達と一緒ににおやまづくりをし、おやまが大きくなっていく嬉しさを共有することで、友達と一緒に遊ぶ心地よさを感じることができた。また、保育者が子どものしている遊びに関心をもち、嬉しさに共感しながら、したい遊びを安心して遊べる関係を築いてきたことで、少しの間、保育者が離れても遊びを続ける姿も見られるようになってきた。

[4歳児] 「おもしろいコースができたよ」 [9月] 保育者の援助 _____ 子どもの心の動き



ビールケースやトイをつなげてコースをつくり、水を流したり、カプセルを流したりして遊ぶことを楽しんでいる。毎日、コースは違って、日々続けて楽しむ姿がある。ビールケースやトイなどをいくつか、部屋を出たすぐ側に置いておくことで、「今日もコースをつくって遊ぼう」と、友達同士誘い合って遊びの準備が始まった。

今日も、どんどんコースが長くなってきた。「水が足りなくてカプセルが流れないよ」と言うA児。それを聞いたB児が、手桶をつかってどんどん水を流している。保育者が、『B君が水を流してくれたから、カプセルが流れたね』と、B児の行動を言葉にして伝える。

また、「こうしたいねんけど、どうしたらいいかな」と、高低差を出すために、トイを手で支えながら、どうしたらいいのかと考えるC児やD児。保育者が代わって、手で支えるなどしてトイを高く持ち上げることで水が流れていく。『手で支えなくてもいいように、どうしたらいいかな』と子どもたちに問いかけながら一緒に考えていった。このままでは遊びが途切れてしまうのではないかと思い、『この手桶を置いてみたらどうかな』と、保育者が子どもたちに提案した。手桶を置いて高さを調整することで、子どもたちがイメージしていたコースが実現し、嬉しそうに何度も水やカプセルを流し、楽しむ姿があった。

また、今日は、偶然に、トイが重なり合って、新たなおもしろいコースができ、そのコースを存分に楽しむ姿もあった。

(反省・評価)

偶然のおもしろさや発見を大切に、子どもが感じるおもしろさに共感しながら、子どもと一緒に考え、楽しめる機会を大切にしてきた。さらに、友達同士の思いを橋渡ししたり具体的な解決策を提示したりすることでうまくいかなかった部分が解決でき、達成感につながった。今後は、遊びの中で成功や失敗など子ども自身の葛藤を大切にしながら、問題解決の糸口になるような問

いかけを保育者が行い、子どもが考える場をもてるようにしていきたい。

[5歳児] 「またつづきをしたい」 [9月]

保育者の援助 _____ 子どもの心の動き



つくった泡を片付けず、「また続きをしたい」と明日もしたいという思いを伝えてくれた。いつもならば園庭に飾っていたが、すぐにつくったものを見たり遊べたりできるように廊下に飾っておけるように場所を用意した。泡づくりでつくったものが、「ふわふわやったのに、トロトロになっている」「泡が減った」と廊下に出た時にすぐに確認している姿があった。保育室の前には花を植えているプランターもあり、遊んでいくと「色水もしてもいい?」「泡に色付けたいねん」『えっおもしろそう』『色つく綺麗になるのかな?』と保育者も子どもの考えに共感し楽しみにしていることを伝え見守った。できた色水をつくった泡にいれると「え!色が変わった!」「すごい!」と発見していた。『紫が緑になったん!』『大発見やね!』と認めた。また、パンジーの葉っぱを擦ると粘りが出ることを知った子は、泡に入れてみるとどうなるのかを試す姿があった。「明日になったらどうなるか置いてるねん」とすぐにはなく時間をかけて取り組むことも出てきた。数日後ふとしたタイミングで泡立て機に膜ができたことに気づいた子が吹いてシャボン玉を飛ばそうとしていた。みんなに様子を伝えていくと、液づくりから取り組んでいき、友達と伝え合うことで水や石鹼の量に気づき、その後は液づくりからシャボン玉をつくるまでを楽しむようになっていった。

(反省・評価)

子どもが今夢中になっていることを続けて欲しいという願いから、子ども達がすぐに試せる、見れる、遊べる、飾れるといった環境を整えていくことで、保育者や友達に気づいたことや起きたことを伝え合い、共感しあうことや友達のつくったものを見せ合い、自分もしてみたい、もっとやってみようとする次の日の遊びへの継続につながっていった。

外だけでなく、どんなときでも遊べるようにしたことで子どもの遊びたいことが継続し、気づきが広がっていったことを感じた。

5. 研究の成果

3歳児では、安心して過ごせるように、保育者が一緒に遊び、楽しさに共感することを大切にしてきた。保育者との安心できる関係を土台として、様々な環境や友達への興味を広げ、いろいろな遊びを試みようとする姿がみられるようになってきた。子どものやってみようという思いに寄り添い、手伝ったり一緒に考えたりする中で、子どもはできたという達成感や満足感をもつ。また、一緒に喜んでくれる保育者や友達の関わりが、またやってみよう、もっとやってみようという気持ちにつながり、しなやかな心と体を育んでいくのではないかと感じた。

4歳児では、柔軟に環境に関わり遊ぼうとしたり、どのようなことも友達と一緒に楽しもうとしたりする子どもの姿を目指して保育してきた。保育者は遊びの場の構成を考え、継続して環境構成をしたり、一緒に遊び、見守り、認める言葉掛けをしたりしてきたことで、子ども一人一人がやってみようという遊びを見つけたり、遊びのおもしろさを味わい自分なりに考え、継続して遊ぶ姿につながった。また、遊びの中で、子どもの気付き、つぶやき、疑問をひろい、保育者が言葉にして周りの子どもたちと共有していくことで、みんなで一緒に考えたり、試してみたりする姿が見られるようになってきた。そうすることでみんなのイメージが実現した時の喜びを共

に感じられる経験につながった。

5歳児では、しなやかな心と体とは、好奇心・探求心をもって自分なりに関わり試行錯誤を繰り返し、困難を乗り越え様々なことに挑戦しようと自立する力(レジリエンス)・柔軟とたくましさであると考えてきた。また身の回りの環境に対して興味関心をもち、なぜだろう・やってみたいな・やってみようと思いを動かすことではないかと考え、1年間意識しながら保育してきた。保育者が子どもをみとる中で、決めつけて捉えるのではなく、柔軟な捉え方が大事であると実感した。子どもが遊びの中でいろいろな気づきをしている姿を見逃さず、意識して遊びの楽しさを共感したりタイミングよく認めたりしてきた。子どもがやってみたいと思った時に、適切な関わりや援助をすることで、より子どもの遊びの広がりや意欲、探求心につながった。なによりも保育者がしなやかな心や考えをもって行動・援助をしていくことが、子どものしなやかな心や体を育むことの第一歩になると感じた。

6. 今後の課題

しなやかとは、どういうことかを職員で共通認識していけるように話し合うことから始めた。今年度は、子どもの力を引き出すための保育者の援助を意識していくことで、自分の保育をより見直すことにつながったように思う。そして事例で伝えあうようにしたことで互いの考えを知るきっかけにもなった。保育者同士で伝え合い、考え合うことでさらに深められるように保育者の援助の仕方について、話し合いの持ち方や頻度をみなおし内容を考えていくようにしたい。またなぜそのような関わりを選んだのか、他にはどんな方法があるのかといった様々な視点から援助について深めていきたい。